

日蓮大聖人御書全集

みようしんあまごぜんごへんじ

妙心尼御前御返事

みよう じくどく こと

（妙の字功德の事）

新版
1971
〜
1973

みようしんあまごぜんごへんじ

みよう

じくどく

こと

妙心尼御前御返事（妙の字功德の事）

けんじ

ねん

どう

ねん

がつ

にち

建治2年（'76）または同3年（'77）の5月4日

55歳 または

さい

種々

物 た

そうろう

すずのもの給びて候。

当時

農 とき

ひと

暇

とき

とうじはのう時にて人のいとまなき時、かように

種々

送

た

そうろう

もう

くさぐさのどもおくり給びて候こと、いかにとも申

そうろう

こにゆうどうどの

おん 別

すばかりなく候。これもひとえに、故入道殿の御わかれ

忍

おんごせ

おん

そうろう

のしのびがたきに、御後世の御ためにてこそ候らんめ。

後世

弔

たま

そうら

幾

嬉

ねんごろにごせをとぶらわせ給い候えば、いくそばくうれ

56歳 窪尼

さい くぼのあま

しくおわしますらん。

訪　ひと

くさ

つゆ　繁

娑婆世界

とう人もなき草むらに露しげきようにて、さばせかいに

留　置

幼

者

行　方　聞

とどめおきしおさなきものなんどのゆくえきかまほし。あ

そ　ぶ

こ　こ　く

じゅうくねん

め　こ

恋

の蘇武が、胡国に十九年、ふるさとの妻と子とのこいしさ

かり　あし　付

文

あべのなかまろ

かんど

にほん

帰

に雁の足につけしふみ、阿倍仲麻呂が、漢土にて日本へかえ

とき

ひがし

出

月

見

春

日　野

つき

されざりし時、東にいでし月をみて、あのかすがのの月よ

詠

み

当

とながめしも、身にあたりてこそおわすらめ。

ほけきよう

だいもく

常

唱

たま

しかるに、法華經の題目をつねはとなえさせ給えば、こ

みよう

もん　字　おん　使

へん

たま

もん　じ　ゆ　し　り

の妙の文じ御つかいに変ぜさせ給い、あるいは文殊師利

ぼさつ

ふげんぼさつ

じようぎようぼさつ

菩薩、あるいは普賢菩薩、あるいは上行菩薩、あるいは

ふきようぼさつとう

たも

陳氏

鏡

鳥

常

不輕菩薩等とならせ給う。ちんしがかがみのとりのつねに

告

そぶ

妻

砧

音

聞

つげしがごとく、蘇武がめのきぬたのこえのきこえしがご

娑婆世界

めいど

告

たも

とく、さばせかいのことを冥途につげさせ給うらん。

みよう

もんじ

はな

菓

はんげつ

また妙の文字は、花のこのみとなるがごとく、半月の

まんげつ

へん

ほとけ

成

たも

もんじ

満月となるがごとく、変じて仏とならせ給う文字なり。さ

きよう

い

よ

きよう

たも

すなわ

ぶっしん

たも

れば、経に云わく「能くこの経を持つは、則ち仏身を持

てんだいだいしい

いちいちもんもん

しんぶつ

とううんぬん

つなり」。天台大師云わく「二々文々これ真仏なり」等云々。

みよう

もんじ

さんじゆうにそうはちじつしゆこうこうえんび

たも

しゃか

妙の文字は三十二相八十種好円備せさせ給う釈迦

によらい

如来にておわしますを、我らが眼つたなくして文字とはみ

われ

まなこ

拙

もんじ

見

そうろう

たと

蓮

み

いけ

なか

お

まいらせ候なり。譬えば、はちすの子の池の中に生いて

そうろう

そうろう

蓮

そうろう

年

寄

そうろうひと

まなこ

候がように候はちすの候を、としよりて候人は眼

暗

見

夜

影

そうろう

闇

見

くらくしてみず、よるはかげの候をやみにみざるがごと

みよう

じ

ほとけ

そうろう

し。されども、この妙の字は仏にておわし候なり。

みよう

もんじ

つき

ひ

ほし

鏡

またこの妙の文字は、月なり、日なり、星なり、かがみ

ころも

じき

はな

だいち

たいかい

いっさい

なり、衣なり、食なり、花なり、大地なり、大海なり。一切

くどく

あ

みよう

もんじ

たも

によいほうしゅ

の功德を合わせて妙の文字とならせ給う。または如意宝珠

珠

知

たも

詳

のたまなり。かくのごとくしらせ給うべし。くわしくは、

またまた申すべし。もう

ごがつよつか

五月四日

伯耆どの

はわき殿、
申させ給え。もう たま

日蓮にちれん

花押かおう